

備考(一)上人この旅の隨行者良一と日記中の廿六日の條慎吾とは同一人なり。

良一については後に記す。

(二)日記中の小淵村の眞野亭助とは、上人の妹音羽(系圖參照)の天である。又下野村澤木又市(廿日の條)も上人の妹の嫁入先である。

それから上人は中山道を名勝・古蹟をたづねながら進まれて、信州善光寺へ参詣せられた。

詔善光寺

扶桑第一古瓦場

堂後堂前花木香

來趾更知心竟淨

白毫光裡利生長

當時の吟詠である。次いで上田城下を過ぎ、沓掛、碓氷峠を越えてやがて江戸へ入られた。江戸市中所々を見物して、歸りは東海道をとつて、鎌倉を見物し、次いで珍しくも富士登山をせられたのである。當時の日記を轉載してみよう。

六月廿三日

晴

早天出立へ前日は足柄山下、嶽の下鈴木屋宿泊であつた。

是より富士山の麓須走口迄(此處かやの不多し田舎道三里、至而淋し。野原又は林間等にて人通少し。おもひやるべし。四時頃、須走に着、同所米山惣太天といふ御師の方に休足(此須走といふは即ち相模口にて御師等家數凡

二百余もある所なり。當所に瀧あり。至而冷水是にて始離す。諸事支度相整、合力者壹人相雇登山す。麓には富士淺間大権現の社あり。是へ參詣、夫より三里八町の間は樹木多し。爰にて又休足。是より一合、二合等といふ。凡四合目迄迄は小本又は草木あれども夫より上には少しも青葉の物なく全く焼山也。実に古は烟にて山形もしれざりしにや、焼け止み烟盡きて山形あらはれしものと覺ゆ。一山焼石のみ、但し一合目半合目毎に石室あり。或は諸尊の堂もあり。何れも參詣す。當山は毎年六月朔日より七月晦日まで六十日の間參詣多し。日暮の頃八合目（但し甲州より登れば八合目を頂上といふ。）石室に止宿。同宿多し。別而今夜廿三夜にて月出至而靜に參拜す。但し懐き少々不快なり。

廿四日 快晴

此石室にて寅半三刻より昇曰拜禮へ俗に之を富士の奉迎といふ。朝雲にうつるけしき実に三尊の奉迎ともおもはれ、いとゞありがたし。五雲のよきほひ萬事中々言葉に筆に及びがたし。人々おもひやるべし。夫より九合目より頂上へ登り、御鉢廻りといふて、絶頂に古への焼穴あり。廻りに八つの岑あり。此廻り三十六丁あり。表山天宮口是は東海道吉原より上る。大日如來裏山（是れ相模嶺走口より登る）葉師如來、其外彌陀如來、觀世音等の諸堂御座す。又御たらいといふて井二ヶ所あり所謂金水、銀水なり。

雪多く積りつら、水等も后より下りあり。寒き事寒中の如し。但し頂上にも店ありて、あまざけ或は菓子、めし等もあり。何れも麓より出店也。惣而六合目より上には所々に雪あり。宝永山といふも六合目の上邊にあり。是は山かけ其土小山のやうになりし也。一山四方晴にて近國は言ふもさら也。遠方の高山等眼前に見ゆる。昨今の如き快晴は夏中に四五日もありと云。何れも拜参終りて八ツ時過頃下山へ但し下山の節は走りと言ふて上りの道の外急なる所をはしる故に、一足に凡一間余づ、飛下り至而はやし須走米山惣太夫が冢に止宿。昨日登り道凡十里餘。今日下りは少し上下合十五里斗り也減少か。當山にて

高根ぞとかもひの外の山々は皆此山のふもとにぞある。

登富士山即支

麓野縦横翠樹重	暴風飛石路埋蹤
回頭八面都無礙	下望千山如浪濃
月照暮江擬空地	日臨朝靄現尊容
莫言東海希佳境	請見南州第一峯

それから上人は、川口湖の風光を賞し、甲斐から富士川を下り蘆埴峠、由井の

駅から東海道を西して、佐夜中山夜泣石を見物、大野峠から三河國へ山越え、鳳来寺山へ登り、藥師餅、東照宮拜参——ついで豊川に出て、豊川大明神拜礼、再び東海道を名古屋に出で、尾崎村の生家へ着された。この頃の日記は次のやうに書いてある。

七月五日 晴天

名古屋出立、御城内通りぬけ、巾下町より琵琶島橋通り、但し中島にて休足、小田井通り、岩倉道へ出、(但し途中より少々不快也)尾崎村迄此道五里、七ツ時帰着之夏

六日より十五日まで晴天 笠供養等同所にて相勤

十六、十七両日とも夕立雷雨、今夕砂場村、宮後村へ当村は往古蜂須賀氏の古城跡なり。〆等の觀世音へ参詣。十八日晴 十九日曇

二十日 晴

但し八ツ過より細雨(今日二百十日なり。)

尾崎出立、木曾川小松渡

しといふを打渡り、中山道へ出、美濃國岐阜町に立入り、(当所は中古齊藤并織田等の居城なり。〆金華山并稻葉山是古城跡なり。眺望、町々見物へ當時尾州家の御領地、町数六十丁余有之。夫より長良川打渡り(当川は船の名物にて、かひの名所也。〆爰にて

かゝり火に あくるを知らぬ うふねかな。

夫より則武村といふに尋ぬる人ありて立寄、用弁して、芝原、北方といふ町を通り、再び中山道へ出、薄暮の頃、美江寺駅丸屋といふに止宿、今日道程田舎

廻り道とも凡九里餘なり此辺より西国三十三番谷汲寺へ五六里に近し。

廿一日 細雨 美江寺出立、此間二里八丁。平地道、梨子の名物あり。又近年蠟石の出る山ありて石細工の家多し。義朝の旧跡、葭竹の坊といふあり。赤坂駅、此間一里半、箭野の原古戦場。熊坂長範の旧跡あり、暫く野山道にて淋しく里汗駅当所より名古屋廻り街道大垣城へ十町石戸田侯の居城なり。追分道あり。又南宮太社へ当所より半道斗りあり。此間一里半関ヶ原駅。此辺往古不殿の関の旧地也。又北國街道の追分道あり。此間一里、寝物がたりと言うて、美濃・近江兩國の境に一村あり。立場なり。今次駅此間一里、柏原駅亀丸屋といふに止宿當所は伊吹山の麓にて艾の名物、本家亀屋元京といふ人の知る處也。又此辺山家にてかりやすの草沢山に出る處也。

伊吹山此辺の高山にて遠望よし爰にて

伊吹なるをめぐりが原のさしも草さしも久しきためしなるらん。

当駅迄尾州より屯人見送り來り候。今日道程七里八丁。

(後略)

それから上人は京都へ出、ついで淀川を舟で大阪、大阪から瀬戸内海を西へ、黒崎船で黒崎へ上陸せられた。此間でも風の都合などで幾度も滞帆せられた。そして長崎へ出、同年九月二日の夕朝帰庵せられた。

此の旅は總計百六十六日間であつた。そしてこの旅行文は「安政二卯年参宮并
所々巡拜日記」に、くはしく載せられてゐる。上人の旅に対する用意も実に同利
なもので、巻頭に尤の心得、ながある。

旅路に心得のうた
但し古人のうたもあれども
今は新に是をよむ。

はり糸 何が及物もいるもので
あさだちはいつも夜明と心得て
道づれや あひ宿あらば油断なく
宿だちは いふも更なり休む度
くふものやのお酒、湯茶に気をつけて大食せすに度々に 食へ
くすりの類も少し持つべし
七ツ頃には 宿かりぬべし
心の駒の 手綱ゆるすな
あと見よそわか

なほ巻末に各国咄がある。序に記して当時の状態を偲ばう。

京都咄

禁裡并仙洞御所其外堂上方御館去年烟上に付、当卯年御造営にて、御奉行茂根
侯御出張、其外関東より諸役人御上洛、尚又諸國より諸職人上京、御普請最中
にて大に賑々敷、尤当卯九月限御成就にて十一月頃には御遷幸と云

華頂山惣門出來、黒谷山門出來、至而見事也。東本願寺筋堀御取上にて至而見苦
敷事也。

祇園新地等凡四ヶ所、藝者、遊女已前之通御免に相成追々賑々敷景色に相成候事。

南都 咄

聖武天皇千百年御遠忌に付、大佛開帳并諸國聖へ黄衣着用東大寺より免許。
往古帝王之御陵御取調相始り寺院より御問合之事。

大阪 咄

去寅十一月津浪にて道頓堀下にて橋五ツ、又外にても橋損し、都合橋數十三落
候て人死多し。依之所々にて川施鯀鬼供養有之。

御城御修覆有之并大手前並本松新に植付にて大に結構に相成候事。

東海 道 咄

去年大地震にて四日市・掛川・江尻・沼津等別而破損之上焼失死人至而多し。
其外宿々共破損有之。道筋大損し、普請所多し。此外大和南郡邊宿々并に伊賀の
國等同断。損所多く死人有之候事。

伊勢 咄

当卯の春二月三月中頃迄御影参にて大に賑々敷。但し此度は近國斗りと申事也。

堺 咄

新地築出し橋普請出来、遊所轉地に相成、昔よりは大に賑々敷至而宜敷相成候事

江戸 咄

牛込区酒屋の娘十七歳にて一夜大熱病の處、轉成男子に相成古今珍敷事也。

高輪前海中に五ヶ所御台場御出来、何れも廻り丸壹里餘にて八角、高さ丈餘見事なり。同所に薩州侯之御持船、ヲロシヤ造りの船一艘滞帆。見物舟敷多にて賑々敷事。

兩國橋普請にて假橋也。同所東橋詰にて蒸気船の見せ物あり。見物す。珍物也。

深川常盤町邊遊女無之、大に淋敷事。同所靈巖寺住持代々常紫衣、初許結構也

長崎高嶋四郎太夫御赦免。江川太郎厄衛門殿手附になり、高嶋喜兵衛と改名、

海防方に被仰付候よし。

伊豆國下田浦にアメリカ人貳人滞在、是は交易御免に相成に付人質と云々、近々屋敷出来候よし。

小石川傳通院本堂普請見事に候也。

因に鎌倉光明寺山門出来、惣金御紋上り猶又如己前。勅額上り見事に候也。
惣而去年大地震に付町々損所多く、其上火事にて所々焼失。尚又諸御屋敷鐵砲之
稽古就中大森辺海近き場所にて、大筒の稽古有之日々音高し。
右之外格別の変りは無之候得共、先は町家不景気之様に見受候事

此外今度経國の所々田畑とも諸作先は豊年之姿にて何方も見事に候。天下泰平
云 謹白。

安政二卯年十一月

(なほこの巡拜日記は、尾崎慎吾の署名があるが、上人の筆跡であることは、上
人の著「西洋漫草」その他と照合すれば明白である。この日記に強いて尾崎慎
吾へ上人の(実子)の名を用ひられたのは、上人配流中なので、世間を憚つて、
かやうにせられたのであらう。)

前後二回にわたる九州旅行、並びに天保十二年、弘化四年の旅。それによつて安
政二年の巡拜の旅。上人は生涯中旅に暮された事が可成に多い。旅は上人の詩情
をそゝり、更に上人の心境に偉大の貢献を與へたであらう事も想像される。

其後、上人の晩年。門人達の間には、「臨川庵。」を永久に記念するために、建碑の議がまとなり、遂に慶應二年に臨川庵の軒端に建設せられたのである。
 〔現在の池崎友義氏（臨川庵の条参照）の所有地内に苔むして残されてゐる〕
 その碑文は左の通りである。

（前面）

昔為帝京華美客 今成岑嶼白頭身

榮枯無定塞翁馬 憂喜知程臥月人

興之阿之者、奈爾歎以謂天無浪華江乃

日止理美登里乃世能那加楚加之

殘夢道人

大清同治四年小春月 高春芳書

（背面）

賜香法眼大僧都定舜和尚、世姓脇田氏、尾陽之產而石井貢門行宣卿之猶子也。
 夙昇華頂王宮得度侍誦定典上人之室即定說大僧正之孫也。曾奉仕座主一品大
 光明院法親王螢雪屢有功于越奉、勅住清淨香院為第一世也。西淨宗傳燈之名
 號尊蓮社念譽上人稱阿大通矣。天保壬辰之秋量移於岑州居、自稱殘夢道人因記